

# バーナード・マラマッドの主人公

住本哲子

## Malamud Heroes

AKIKO SUMIMOTO

### I

The time is out of joint;—O cursed, spite,

That ever I was born to set it right!— (I. v. 189—190)<sup>1)</sup>

これはハムレット (Hamlet) の言葉である。父の亡霊が現われハムレットに復讐を命じた時、ハムレットの心は激しく動揺する。何故だろうか。叔父が父を毒殺したことを知らされたからというよりも復讐という課題を与えられた自分の運命を悟ったからではなかろうか。倫理感覚が喪失し、腐敗した状態を“out of joint”という言葉で表現していると思われるが、そのたがを直すのがハムレットに課せられた運命である。とすればハムレットと亡霊との出会いがハムレットの運命を悲劇に導くものといえよう。ハムレットは復讐という重荷を背負わされ、復讐という行動の前に悩み逡巡し、ジレンマに陥る。情欲を満足させるために父を殺害した叔父のクローディアス王 (Claudius) と母のガートルード妃 (Gertrud) との不倫な関係に嫌悪と激怒を覚え、復讐を誓うが実行を妨げさせるものがある。われわれはこの逡巡するハムレットに現代の苦悩する人間像をみて心を動かされる。

さてバーナード・マラマッド (Bernard Malamud) の小説を読む時、‘luck’ とか ‘fate’ あるいは ‘prison’ とか ‘prisoner’ という言葉がよく使われていることに気付く。この「運命」とか「牢獄」はマラマッドの小説においてどのような意味を持っているのだろうか。短篇集『魔法の樽』(The Magic Barrel, 1958) の中に収められた「魔法の樽」(“The Magic Barrel”, 1954) 及び三つの長篇小説『アシスタント』(The Assistant, 1957)、『もう一つの生活』(A New Life, 1961)、『修理屋』(The Fixer, 1966) を取り上げ、考えてみたい。

対談 (1971) でマラマッドは彼の小説の登場人物について次のように語っている。

A Malamud character is someone who fears his fate, is caught up in it, yet manages to outrun it. He's the subject and object of laughter and pity.<sup>2)</sup>

マラマッドの描く人間像は避けられない運命に巻き込まれる羽目に陥るが、それを乗り越えていこうとする。運命の糸に操られる人間の行動を阻止する閉塞状態を表わす比喩が「牢獄」であり、その中に閉じ込められ呻吟する者が「囚人」であるといえよう。

マラマッドは彼の作品の基調をなす ‘prison motif’ について対談 (1973) で次のように語っている。

It's a metaphor for the dilemma of all men throughout history. Necessity is the primary prison, though the bars are not visible to all. Then there are

the man-made prisons of social injustice, apathy, ignorance. There are others, tight or loose, visible or invisible, according to one's predilection or vulnerability. Therefore our most extraordinary invention is human freedom.<sup>3)</sup>

人間の閉塞状態，即ちジレンマを表わす「牢獄」には根源的なものと人為的なものがある。人間の自由は必然的に限定されているので，根源的な「牢獄」は人間に課せられた宿命といえる。又人為的な「牢獄」とは人間を取り巻く社会的状況をさす。マラマッドが『もう一つの生活』の主人公シーモア・レヴィン (Seymour Levin) の分身ともいうべきリオ・ダフィ (Leo Duffy) に “The time is out of joint.”<sup>4)</sup> と語らせた時，明らかにハムレットの場合同様，社会の腐敗に対する鋭い認識がある。マラマッドの作品を理解する上で重要な手がかりを与えてくれる，この対談での発言より早く，この ‘prison motif’ に注目し，処女作『天才児』 (*The Natural*, 1952)，『アシスタント』『もう一つの生活』『修理屋』の四つの長篇小説についての的確な指摘をしたのは，ジェリー・H・ブライアント (Jerry H. Bryant) とロバート・アルター (Robert Alter) の二人の批評家である。ブライアントはマラマッドの主人公がしばしば自分を「囚人」と考える理由について，「それは限界を認識する結果によるものであり，人間である限り誰でもジレンマに苦しむのは当然である」<sup>5)</sup> と述べている。一方アルターは人間は限界を受容する運命にあることを暗示するイメージが「牢獄」であると考え，‘Malamud's central metaphor for Jewishness is imprisonment’<sup>6)</sup> だと指摘している。『修理屋』以前の小説では「牢獄」は人間の閉塞状態を表わす比喻として使われているが，『修理屋』では実在する「牢獄」が主人公の自由を剥奪するものとして猛烈な迫力でわれわれに迫ってくる。

それでは「魔法の樽」及び三つの長篇小説『アシスタント』『もう一つの生活』『修理屋』の主人公がそれぞれ，どのような運命に巻き込まれ，又それをどのように受けとめ行動するかをたどってみよう。

## II

『魔法の樽』の中でも最も美しい短篇の「魔法の樽」<sup>7)</sup> は主人公リオ・フィンクル (Leo Finkle) の ‘moral adventuring’<sup>8)</sup> ということができる。リオはニューヨークのイエシヴァ大学の神学部の学生である。聖職のラビにつくには結婚していた方が有利といわれ，結婚仲介人のピニィ・ザルツマン (Piny Salzman) に花嫁探しを依頼する。ところがザルツマンがすすめる女性は未亡人とか年上の女性なのでリオは失望する。リオは花嫁探しをする過程で両親以外の人間を愛した経験がないことに気付き愕然とする。人を愛することのできない者に果たして神を愛することができようか。もしそうなら聖職につく資格などないと思い，うろたえ悩む。愛こそ自分の求めるものと考えたリオは自分の力で愛する女性を捜す決心をする。とはいえそれは容易なことではなかった。ある日ザルツマンから届けられたお見合い写真の中に偶然まぎれ込んでいた一枚の写真にリオは激しく心を引かれる。写真の女性は驚いたことにザルツマンの娘ステラ (Stella) であることがわかる。リオはステラが聖職にふさわしくない女性であることを知り，悶々と苦悩の日々を過ごす。そして思い悩んだ末にリオは娼婦ステラを花嫁として選ぶ決心をする。

「魔法の樽」の幻想的な結末の場面は美しく，哀しい。

Stella stood by the lamp post, smoking. She wore white with red shoes, which fitted his expectations, although in a troubled moment he had imagined the dress red, and only the shoes white. She waited uneasily and shyly. From

afar he saw that her eyes—clearly her father’s—were filled with desperate innocence. He pictured, in her, his own redemption. Violins and lit candles revolved in the sky. Leo ran forward with flowers outthrust.

Around the corner, Salzman, leaning against a wall, chanted prayers for the dead.<sup>9)</sup>

リオはステラへの愛を誓う。“He then concluded to convert her to goodness, himself to God.”<sup>10)</sup>とリオは思いステラを花嫁とする決心をしたと語っている。マーカス・クライン (Marcus Klein) はリオとステラの関係について、“Quite like the grocery store, she is an open tomb, into which Leo leaps.”<sup>11)</sup>と述べている。「リオが自ら「牢獄」に身を投じたのだ」という解釈は的確である。ここで「牢獄」とはリオが“commit”する対象を意味する。リオはザルツマンの仕組んだわなにかかり、ステラを花嫁とすることになったのだという疑いを抱く。その意味ではリオはステラの相手を捜していたザルツマンから選ばれたといえる。それでもあえてリオは墮落した女性を花嫁とする。花束を持ってステラの方に駆け寄るリオ。リオとステラの姿をみて祈りを捧げるザルツマンは何者なのか。神なのかも知れない。とすればリオは神から娼婦と結婚するように選ばれたのだ。リオは選ばれたのであると同時に選んだのだ。魂の遍歴の末にリオはステラとの苦難の人生を選んだのである。リオは救うことにより救われるのである。そう解釈するとリオの前途を照らす一条の光をみることができよう。<sup>12)</sup>

「魔法の樽」以後に発表された長篇小説『アシスタント』『もう一つの生活』『修理屋』はこの「魔法の樽」が原型となっていると思われる。作者の意図があったかどうかは、わからないが。

『アシスタント』『もう一つの生活』『修理屋』の主人公は暗い過去を背負っている。彼らは皆天涯孤独な境遇にある。フランク・アルパイン (Frank Alpine) の両親も、ヤーコフ・ボク (Yakov Bok) の両親も幼少時に死亡、孤児院で苦勞する。レヴィンの父は窃盗の常習犯で刑務所で死亡し、母は自殺をとげた。レヴィンは大酒飲みとなりずさんだ生活をしていた。フランクもレヴィンもヤーコフも暗い過去を棄てるために新しい土地に移り、新しい生活を求めようとする。彼らが期待した新天地では不幸にも彼らは運命のいたずらに翻弄されて苦しむ。彼らは苦しみに耐えて生きることにより人間的に成長し、自己を確立する。

『アシスタント』の主人公フランクは幸運を求めて西部からニューヨークにやってくる。フランクはいつも運命の女神から見放され通しで、失敗と挫折の人生を送ってきた。彼は “With me one wrong thing leads to another and it ends in a trap.”<sup>13)</sup>と語り今度こそ立ち直り、まともな生活を望む。ところが実はフランクは食料品店主モリス・ボウバー (Morris Bobber) を襲った強盗の片割れであったのだ。フランクはモリスに対する罪の意識から、モリスの店から離れることができない。フランクには食料品店は ‘death tomb’<sup>14)</sup> だと思える。たいした商いのない小さな食料品店は入ったら最後抜けだすことができない墓なのだ。

フランクはモリスの人生について考える。

What kind of man did you have to be born to shut yourself up in an overgrown coffin and never once during the day, so help you, outside of going for your Yiddish newspaper, poke your beak out of the door for a snootful of air?

The answer wasn't hard to say—you had to be a Jew. They were born prisoners.<sup>15)</sup>ユダヤ人は生まれつき囚人なのだ。肩に商品を背負って電球を売って歩く行商人のブライトバート (Breitbart) にしても、食料品店主のモリスにしても貧乏暮らしから抜け出せないのだ。彼らは苦しむために生きているのだ。“That's what they live for, Frank thought, to

suffer.”<sup>16)</sup> モリスによれば、“They suffer because they are Jews.”<sup>17)</sup> なのだ。だがフランクにはまだ苦しむことの意味も耐えて生きていくことの意味も理解することができない。店番をしている時に、店のレジからお金を盗んだりするのもモリスのような生き方ができないからだ。“to do what is right, to be honest, to be good”<sup>17)</sup> な生き方がユダヤ人の生き方なのだが、フランクは食料品店をささえるために35ドルの給料でオールナイト営業のスナックで夜の10時から朝の6時迄アルバイトをする。流れ者の生活をやめて意味のある生活をしようと決心するのである。“He thought endlessly of escape, but that would be what he always did last—beat it. This time he would stay.”<sup>18)</sup> という言葉はフランクの堅固な意志を表わしている。本当の新しい生活は転地により得られるのではない。苦しみに耐えることにより新しい生活ができるのだ。自分の不運を嘆き、過去から逃れることは自分から逃れることになるのだと悟る。フランクはモリスの“He suffered, he endured, but with hope.”<sup>19)</sup> という生き方を手本として見習おうと決心する。だが強盗の一件をモリスに告白したフランクは期待した赦しが得られず、店から追い出されてしまう。幸か不幸かモリスの突然の死がフランクの運命を変える。モリスのお葬式の日、墓地でフランクは足を踏みはずし、ひつぎの上に落ちてしまう。“He lost his balance, and though flailing his arms, landed feet first on the coffin.”<sup>20)</sup> というエピソードは重要な意味を持つ。この墓地でのフランクの失敗は滑稽であるがフランクの狼狽を想うと哀れでもある。がフランクはひつぎの上に足を乗せることにより、モリス同様“In a store you were entombed.”<sup>21)</sup> となることができる。フランクが食料品店から離れられなかった別の理由は、モリスの娘ヘレン(Helen) に対する愛のためである。ヘレンに冷たくあしらわれてもヘレンを忘れることができない。フランクはひたすら耐えて待ち続ける。昼夜ぶっ通しで働き、肉体を酷使することにより苦しむ。苦しむことを学んだのだ。愛する人のために。ヘレンはやっとフランクの努力とフランクの変化に気付く。『アシスタント』の結末の場面は冒頭の場面と酷似している。モリスの死後1年目でフランクはすっかりモリスの2代目になることができた。3セントのロールパンを買いにくるポーランド女性のために、早朝店を開け、行商の途中で立ち寄るブライトバートに紅茶を用意する。商いは相変わらずである。フランクは病院で割礼の手術を受けて改宗する。ひたすら耐えて待ったフランクとヘレンの結婚の可能性を予測させる明るい結末である。

『もう一つの生活』の主人公レヴィンはニューヨークから大陸を横断し、北西部にあるカステディア大学に講師として赴任する。レヴィンもフランクと同じ様に暗い過去の桎梏から抜け出せないでいる。

レヴィンはある朝自己に目覚める。

But one morning in somebody's filthy cellar, I awoke under burlap bags and saw my rotting shoes on a broken chair. They were lit in dim sunlight from a shaft or window. I stared at the chair, it looked like a painting, a thing with a value of its own. I squeezed what was left of my brain to understand why this should move me so deeply, why I was crying. Then I thought, Levin, if you were dead there would be no light on your shoes in this cellar. I came to believe what I had often wanted to, that life is holy. I then became a man of principle.<sup>22)</sup>

レヴィンは朝の光の中に照らし出された自分の靴をみて生命の崇高さに打たれる。新しい自己に目覚めたレヴィンは古い過去を棄て、新しい生活を求めて西部へやってきたのだ。ところ

が意外な運命が待っていた。レヴィンはジェラルド・ギリー(Gerald Gilley) 教授の妻ポーリン(Pauline) と不倫な関係に陥る。大学の講師としての輝かしい将来を夢みて新しい出発をしたのに、その夢はわずか1年で崩壊する。失敗の連続であった自分の人生を立て直そうと考えていたのに、レヴィンは“Hadn't he planned—it said in his notebook—to be a college professor? To Straighten Out His Life? Come to Something? He hadn't planned to be entangled with a married woman.”<sup>23)</sup> と人妻との関係に巻き込まれてしまったことを後悔する。ポーリンとの関係をどうするか。街をさまよいながら考える。

No matter what he had suffered or renounced, to what degree misused or failed feeling, if Pauline loving him loves; Levin with no known cause not to will love her. He would without or despite feeling.<sup>24)</sup>

レヴィンは魂の渇きを癒してくれ、“a man entering a new life”<sup>25)</sup> と感じさせてくれた女性の愛に答える決心をする。ポーリンに対する燃える情熱は最早消えてしまった。ただあるのは“love on principle”<sup>26)</sup> だけである。結婚12年になるギリー教授夫妻の生活を破壊し、その上自分の将来を投げ打ってまでポーリンと生活をともにしようとするのは何故なのか。年上でしかも子連れ的女性と。

‘An older woman than yourself and not dependable, plus two adopted kids, no choice of yours, no job or promise of one, and other assorted headaches. Why take that load yourself?’

‘Because I can, you son of a bitch.’<sup>27)</sup>

ギリーの質問に対するレヴィンの答は“a man of principle”<sup>28)</sup> として生きようとしていることを示している。ポーリンはギリーの言葉通り、生来満足することのできない女なのかも知れない。貞淑な妻になるかどうかはわからないが、レヴィンは重荷を背負おうとするのである。

ポーリン・リオ・ダフィー・レヴィンの関係の巧妙な布石は既に滑稽な冒頭の場面に見ることが出来る。ギリー夫妻の家に招待されて夕食を共にしたカスケディア州のイースチェスターでの第一夜から、レヴィンはポーリンとの奇妙なかかわりを暗示させる体験をする。ポーリンの粗相で夕食の料理の鮪のカサロールをズボンに落とされ、ギリーのズボンをはく羽目になり、おまけに子供のエリック(Erik)がおしっこをレヴィンの膝にもらしたため、ギリーのパンツまで借りることになる。

レヴィンはカスケディア大学で採用されることになったいきさつを知り、“So I was chosen.”<sup>29)</sup> という。ポーリンがレヴィンの履歴書の写真をみてギリーに採用を勧めたのだ。更にレヴィンの前任者リオはポーリンと愛人関係にあり、その破廉恥な関係のために大学から追放され、自殺したことを知らされ動揺する。

ポーリンとの新しい生活を決意したはずなのに迷いが生ずるレヴィン。

The prison was really himself, flawed edifice of failures, each locking up tight the one before. He had failed at his best plans, who could say he wouldn't with her? Possibly he already had and would one day take off in the dark as she lay in bed.<sup>30)</sup>

自分が選ばれたに過ぎないとすれば、ポーリンの偶然の選択に対する責任を負う必要があるのだろうか。レヴィンの決心はぐらつきかける。ポーリンから逃れようとしたレヴィンは過去の“misfit”の生活に逆戻りすることを恐れたのだ。「牢獄」とは閉塞状態にあるレヴィン自身をさしているのだ。自己からの逃避は死しかない。われわれは迷い苦悩するレヴィンに人間ら

しさを認め、心を打たれる。結末の場面は人生のアイロニーを感じさせるレヴィンの再出発の情景である。レヴィンは自分の子供をみごもっているポーリンと二人の子供と共に中古車に乗って、新しい生活へと出発する。マラマッドが作家として影響を受けたナサニエル・ホーソン(Nathaniel Hawthorne)<sup>31)</sup>の『緋文字』(*The Scarlet Letter*, 1850)の結末と比較してみよう。『緋文字』のヒロインのヘスター・プリン(Hester Prynne)は姦通の罪を犯す。墮落したイブの誘惑に屈したディムズデール(Dimmesdale)はアダムといえよう。<sup>32)</sup>罪を悔いるディムズデールに与えられる救いの道は、処刑台の上で罪の告白を行ない、死ぬことにより罪をあがなうことであった。だがマラマッドがレヴィンに与えた結末は贖罪としての死ではなく、姦通の相手の女性との結婚であった。ポーリンのわなにかかったのではないかという疑念は抱いたが、“moralist”として生きようと決心する。愛を求め、愛を見失い絶望するが閉塞状態からの脱却は愛を与えることにより成しとげられる。結末でポーリンにイヤリングを贈るレヴィンはポーリンのために苦しもうとしているのです。愛のために苦しむのです。その証しが二人が愛の絶頂にあった時に買ってしまっておいた‘gold hoop earring’なのです。

『修理屋』の主人公ヤーコフは新しい生活を求めて住みなれたユダヤ人町を離れて、キエフに向かう。ヤーコフはユダヤ人町を崩壊寸前のイメージとしてとらえ、ユダヤ人町を「牢獄」だと考えている。

The shtetl is a prison, no change from the days of Khmel'nitsky. It moulders and the Jews moulder in it. Here we're all prisoners, I don't have to tell you, so it's time to try elsewhere I've finally decided.<sup>33)</sup>

ヤーコフはこの「牢獄」から逃れるためにユダヤ人町を出る。彼は不幸な過去を呪い、神への不信の言葉を吐く。更に自分を捨てて知らない男と駈落ちした妻レイシル(Raisl)の不貞を訴える。ヤーコフは暗い過去を捨て、幸運を求めてキエフに向かったのである。通りすがりに倒れている老人を助けたことから、ユダヤ人であることを隠して老人所有のれんが工場で働くことになる。が幸運を求めたはずのヤーコフの運命は皮肉にも不幸のどん底に突き落とされることになる。ヤーコフは12歳の少年をマッツオにまぜる生血を取るために殺害した嫌疑で逮捕される。2年半の間監禁され非人道的な仕打ちを受ける。ヤーコフは牢獄の中で自分の運命について考える。自分がユダヤ人町を離れたために、こんな悲運にあうことになったのか。否そうではない。現に父はユダヤ人町の路上で酔っぱらいの兵隊に射殺されたのではないか。ユダヤ人であるために犠牲者となったのだ。ヤーコフもユダヤ人であるがために無実の罪で牢獄につながれ苦しむことになったのである。悲運を嘆いたヤーコフは牢獄で自分の過去の生活を反芻する。妻を呪い、神を呪い、ユダヤ人であることを呪ったヤーコフは不幸の奈落で悟る。

『修理屋』はユダヤ歴史を一つの軸とし、ヤーコフとレイシルの愛をもう一つの軸として展開されるヤーコフの自己確立の物語である。さながら地獄のような監禁生活の中で旧約聖書の「ホセア書」を読むことにより、レイシルへの呪いは間違っていたことに気付く。もとはといえばレイシルの不貞のためにユダヤ人町を離れた結果、牢獄につながれる身になったことを嘆いていたヤーコフであったが、自分の非を悟る。レイシルへの愛があったなら、このような悲運にあわなくてもよかったかも知れないと思う。レイシルが独房に面会に来た時、“You stinking whore”<sup>34)</sup>とレイシルの不貞を責める。がヤーコフは“I'm also sorry I stopped sleeping with you.”<sup>35)</sup>と素直にレイシルに詫げる。レイシルの頼みを聞いてレイシルの不義の子を自分の子として認知するのはレイシルへの愛の回復を示すものであろう。監禁生活で飢え、孤独、屈辱、死の恐怖を乗り越え、ただひたすらに耐えて生き続けたヤーコフの意志の強靱さ

に、われわれは驚嘆せずにはいられない。まさに“You lived, you suffered, but you lived.”<sup>36)</sup>といえる。正当な裁きを受けるために法廷に向かう途中、ニコライ2世を射殺するヤーコフの幻想は悪の根源である支配体制の転覆への願望を“myth”として示したものであろう。“Where there’s no fight for it there’s no freedom.”<sup>37)</sup>という決意の象徴とみることができる。かつてヤーコフはユダヤ人としての運命から逃れようとしたが、獄中生活の中で苦難に耐え、ユダヤ人として人間らしい生き方をしようとする。牢獄は自己を直視し、自分の過去をふり返って考える場となる。ヤーコフは受難により悔い改め、人間的に成長し自己を確立する。その意味で「牢獄」は自己解放の原点となっている。『修理屋』の結末は『アシスタント』の結末にみられるような明るさはない。がヤーコフの生きることに對する執着と自由を求めて闘う強靱な意志がヤーコフの運命を地獄の境遇から這い上がらせるであろう。ヤーコフの未来は暗から明への轉換の可能性を感じさせる。

### III

マラマッドは対談（1971）で、“I write about Jews because I know something about them and they move me.”<sup>38)</sup>と語っている。『魔法の樽』では貧しい生活にあえぎながら生きるユダヤ人の主人公が描かれている。岩元巖が指摘するように、「貧しい状況におかれた人間を設定することによって、人間は何のために生きるのか」<sup>39)</sup>を描き出そうとしているのであろう。マラマッドは“I’m an American, I’m a Jew, and I write for all men.”<sup>40)</sup>ともいっている。ユダヤ人を通して人間を描こうとしたのである。ただマラマッド文学のユダヤ人的特質は人間らしい生き方を求めて、苦しみに耐える人間像にあることは、「魔法の樽」を始めとして『アシスタント』『もう一つの生活』『修理屋』の主人公について既にみてきた通りである。バイリス事件をもとに書かれた『修理屋』は決して単なる事実の記録ではない。ヤーコフは、グランヴィル・ヒックス(Granville Hicks)が指摘しているようにアウシュビッツで虐殺された600万人の犠牲者を表わすばかりでなく、“all victims of man’s inhumanity”<sup>41)</sup>を表わすといえよう。対談（1966）でマラマッドは“If you don’t respect man, you cannot respect my work. I’m in defense of the human.”<sup>42)</sup>と語った。マラマッド文学の真髄は「人間とは何か」「人間性とは何か」を追求することにあると思われる。

### 注

- 1) W. Shakespeare, *Hamlet*, vol.1, in *A New Variorum Edition of Shakespeare*, ed. H. H. Furness (New York: Dover Publications, 1963), pp. 117-118.
- 2) Israel Shenker, “Bernard Malamud on Writing Fiction,” *Writer’s Digest* (July 1972), p. 23.
- 3) Leslie A. Field and Joyce W. Field, “An Interview with Bernard Malamud,” in *Bernard Malamud: A Collection of Critical Essays* (Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice - Hall, 1975), p. 12.
- 4) Bernard Malamud: *A New Life* (Harmondsworth: Penguin Books, 1968), p. 288.
- 5) Jerry H. Bryant, *The Open Decision: The Contemporary American Novel and Its Intellectual Background* (New York: Free Press, 1970), pp. 324 - 341.
- 6) Robert Alter, “Bernard Malamud: *Jewishness as Metaphor*,” in *After the Tradition: Essays on Modern Jewish Writing* (New York: Dutton, 1969), pp. 116-130.
- 7) Alfred Kazin, “Fantasist of the Ordinary,” *Commentary* 24 (July 1957), 89-92.
- 8) Marcus Klein, “Bernard Malamud: The Sadness of Goodness,” in *After Alienation*:

- American Novels in Mid-Century* (Midway Reprint, 1978), p.277.
- 9) Bernard Malamud, *The Magic Barrel* (Harmondsworth: Penguin Books, 1968), p.188.
  - 10) *Ibid.*, p.187.
  - 11) Marcus Klein, *op. cit.*, p.277.
  - 12) Sidney Richman, "The Stories;" in *Bernard Malamud and the Critics*, ed. Leslie A. Field and Joyce W. Field (New York: New York University Press, 1970), p.331.
  - 13) Bernard Malamud, *The Assistant* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1977), p. 36.
  - 14) *Ibid.*, p. 60.
  - 15) *Ibid.*, p. 86.
  - 16) *Ibid.*, p. 88.
  - 17) *Ibid.*, p. 125.
  - 18) *Ibid.*, p. 192.
  - 19) *Ibid.*, p. 229.
  - 20) *Ibid.*, p. 231.
  - 21) *Ibid.*, p. 6.
  - 22) *A New Life*, pp. 175-176.
  - 23) *Ibid.*, p. 288.
  - 24) *Ibid.*, p. 292.
  - 25) *Ibid.*, p. 147.
  - 26) *Ibid.*, p. 300.
  - 27) *Ibid.*, p. 310.
  - 28) *Ibid.*, p. 176.
  - 29) *Ibid.*, p. 311.
  - 30) *Ibid.*, p. 312.
  - 31) Daniel Stern, "The Art of Fiction: Bernard Malamud;" *Paris Review*, No61 (Spring 1975), p. 56.
  - 32) Leslie A. Fiedler, *Love and Death in the American Novel* (New York Criterion, 1960), pp. 228-239.
  - 33) Bernard Malamud, *The Fixer* (Harmondsworth: Penguin Books, 1968), p. 14.
  - 34) *Ibid.*, p. 255.
  - 35) *Ibid.*, p. 259.
  - 36) *Ibid.*, p. 295.
  - 37) *Ibid.*, p. 299.
  - 38) Israel Shenker, *op. cit.*, p. 23.
  - 39) 岩元巖 『マラマッド』 (冬樹社, 1979), p. 75.
  - 40) Daniel Stern, *op. cit.*, p.56.
  - 41) Granville Hicks, "One Man to Stand for Six Million," *Saturday Review* (September 10, 1966), 37-39.
  - 42) Haskel Frankel, "Interview with Bernard Malamud," *Saturday Review* (September 10, 1966), p. 40.